Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-17

支えよう東北、いまだ復興の途上 : 東北震災ボランティアに参加して（特集 東日本大震災と防災）

山内, 美貴
荒木, みゆき
近藤, 真緒
三原, 雪乃

(Citation)
兵庫地理,57:25-27

(Issue Date)
2012-03-31

(Resource Type)
journal article

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90003230

支えよう東北、いまだ復興の途上－東北震災ボランティアに参加して－

山内　美貴・荒木みゆき・近藤　真緒・三原　雪乃

（兵庫県立柏原高等学校インターアクトクラブ）

１．はじめに

東日本大震災（ひがしにほんだいしんさい）とは、2011 年 3 月 11 日に発生した東北地方太平洋沖地震とそれに伴って発生した津波、及びその後の余震により引き起こされた大規模地震災害のことである。

２．義援金活動

東日本大震災直後、私たちは、少しでも被災地の復興の役に立てばと思い、5 日間雪の舞う中、義援金活動を行いました。通行する人の多くが立ち止まり、義援金の協力をして下さいました。中には、被災地から避難して来られた家族の方もおられ、自分たちの生活も大変なのにと感じました。また、多くの方に「頑張ってね。」「寒い中、ご苦労様。」などと応援の声を掛けていただきました。この５日間で、60 万円を超える義援金が集まりました。集まったお金は、中央共同募金会と日本赤十字社に送りました。この活動を通して、たくさんの方々の優しさに触れることができました。

３．事前研修会

東北ボランティアツアーの事前研修会として、市内の中学校の先生に、助言と指導をしていただきました。先生は、震災直後に気仙沼でボランティア活動をされていて、「現地の悲惨な状態を目の前にして、言葉が出なかった。」帰り際には「このまま、丹波に帰っていいのだろうか？もっと、自分に出来ることがあるはず。」と感じられたそうです。また、現地の人に寄り添うことが大切だと教えていただき、とてもよい研修会となりました。

４．被災地でのボランティア

(1)参加者

2 年生 6 名、1 年生 4 名の部員 10 名と顧問の先生 2 名、百合学院の先生 1 名の計 13 名。

(2)日程

2011 年 8 月 11 日～14 日

(3)行き先

宮城県の中部に位置する七ヶ浜町

(4)ボランティア活動

8月11日17時　「この4日間、全員で協力し、元気に帰ってきます。」と元気にあいさつをし、ロータリーや先生、保護者の方々に見送られて柏原高校を出発しました。宮城県までは、片道13時間かかります。SAで休憩を挟みながらの長旅です。移動中、夜中に福島沖で地震が発生し、震度５の揺れを体験しました。大きく揺れたため、とても怖かったです。被災地では、今も頻繁にこのような余震が起こっており、被災された方々を思うと、胸が熱くなりました。

朝7時、七ヶ浜町ボランティアセンターに到着しました。ボランティアの受付体制が整っており、スコップやほうき等の道具がたくさん準備してありました。時間が経つにつれ、ボランティアの方々がぞくぞくとやってこられました。中には、小さい子供や外国人の方もおられました。そのあと、マッチングを行いました。マッチングとは、活動場所や活動内容を決めることを指します。今回もたくさんのボランティアの方が来られており、それぞれの活動場

所に分かれていきました。

私たちは、七ヶ浜町ボランティアセンターの方々と壊れた住居の瓦礫の撤去活動を行うことになりました。チームリーダーは、ボランティア経験が豊富な菊池さんです。午前中は、30名程で活動します。リーダーの菊池さんから、「充分な休憩と水分補給を行い、元気に活動しましょう。」などと、活動内容の説明と注意がありました。皆、真剣に話を聞いています。午前の活動場所へ向かう途中には、田に車が横たわったままで、あちらこちらに、瓦礫が散乱していました。色々なものが飛んできたのでしょう。瓦礫が山となっており、奥には、ガードレールが壊れているのがわかりました。今もなお、瓦礫が撤去されずに残されている所が多かったです。中には、壊れた防波堤もありました。防波堤までをもこのように壊してしまうなんて…と改めて自然の力の怖さについて考えさせられました。さらに、今後の防波堤の強化が必要だと感じました。家は、コンクリートの基礎のみが残り、どのような家だったのか、検討もつきません。こんな姿になった家を見るのは初めてで、衝撃を受けました。家の中にも、瓦礫が流されてきたのか、1階の部分がむき出しになっている家が多く、2階部分で生活されている方もおられるようです。

午前中の活動場所に到着しました。ボランティアリーダーの方から作業の説明を聞き、作業を開始しました。瓦やガラスの破片を拾い、スコップなどを使って土嚢袋に詰めていきます。前日に作業されていたこともあり、作業はスムーズに行うことができました。中には、トイレかお風呂のタイルらしきものもありました。いっぱいになった土嚢袋を運ぶのは、一苦労でしたが、皆で協力して、頑張りました。頻繁に休憩をはさみながら活動しました。充分な休憩と水分補給が必要です。塩分をしっかりとり、体を休めました。作業と休憩を何度か繰り返し、午前中の作業が終了しました。「瓦礫のほとんどが撤去され、家の方も喜ばれるはず」と聞いて、嬉しくなりました。気が遠くなるような地道な作業でしたが、やりがいを持って作業することができました。

昼食をとり、午後の活動場所へ向かいました。午後は海の近くまで行き、70名程で活動します。　漁業を行う際に使用されていた建物でしょうか。基礎だけが残り、無残な姿になっていました。船も壊れていて、そのままの状態で置かれていました。作業をした住宅は、漁師をされていた方の家です。全員、防塵マスクとゴーグルをかけて、作コンクリートの上の掃き掃除を行いました。

皆で協力しながら作業を行ったため、非常にきれいになりました。それからは、手作業で瓦礫を拾いました。瓦やガラスの他にも、コップやサンダル、カッターなどの日用品も落ちていて、「全てなくなってしまった」と話す被災地の方の意味がようやく理解できたように思います。それぞれ黙々と作業をしています。土嚢袋が一杯になるまで、瓦礫を拾いました。休憩をはさみながら、無事午後の活動も終了しました。ここでも、たくさんの瓦礫を撤去することができました。始めた時と比べても、だいぶ片付いているように感じることができ、よかったです。そのあとは、ボランティアセンターに戻り、後片付

けを行いました。一日使ったスコップなどの道具を、ブラシを使って洗います。汚れが落ちない道具もありましたが次に使う人のことを考えながら、きれいに片づけることが出来ました。

8月13日は、東松島市へ向かいました。七ヶ浜町よりも被害が大きかったため、作業が手付かずの場所が多く、早く作業をしてほしいという思いとともに、震災から5カ月何をしていたのだろう？と思いました。水浸しの場所もありました。ここにも、家が立ち並んでいたのだろうと思うと悲しくなりました。お盆という事もあり、御墓参りに来られている方が多かったです。中には、倒れている御墓もありました。松島の観光施設は復興に近づいていました。震災直後の写真を見せていただきましたが、ここまで復興するのにどれだけ時間がかかっただろう？と思うくらい、被害が大きかったため驚きました。

５．活動を終えて

皆、元気に４日間の活動を終えることができました。この活動を通して現地に行かないとわからなかったことがたくさんあり、義援金活動などを行ってきたこと共に良い経験になったと思いました。

６．その後の活動

地元に帰ってきてからも、8 月 17 日～19 日の 3 日間、街頭義援金活動を行いました。福島の子供たちを一週間、丹波に招くというイベントの活動資金です。放射能汚染の影響で、外で遊ぶことが出来ない状況の小学生のために、元気に外で遊んでほしい…夏の思い出を作ってほしい…と思いながら呼び掛けを行いました。そして、8 月 22 日～27 日に、市内で福島の小学生を対象にしたサマーキャンプが行われました。私たちは、27 日に模擬店のお手伝いという形で、たこ焼きやお好み焼きを作りました。元気に遊んでいる小学生たちを見ると、とても嬉しくなりました。早く、福島でも外で遊ぶことができるようになればなと思いました。

７．まとめ

このような活動を通して、一時的な活動ではなく、私たちに出来る範囲の活動を継続的に行うことが必要だと感じました。復興するのには、まだまだ時間がかかるとは思いますが、今後も、様々な面で積極的にボランティア活動を行っていきたいです。

（やまうち　みき、あらき　みゆき、こんどう　まお、みはら　ゆきの・兵庫県立柏原高等学校インターアクトクラブ）